1992 年 6 月 5 日 第三種郵便物認可 （毎月 1 回 25 日発行） 2015 年 1 月 12 日発行 KTK 増刊通巻 4237 号

特定非営利活動法人 アジア太平洋地域アディクション研究所 木津川ダルクニュース

KTK HOPE No.3

We Do Recover ～わたしたちは必ず回復する～

KIZUGAWA Drug Addiction Rehabilitation Center 木津川 DARC

今日の自分が好きと言える場所

NPO 法人アパリ・木津川ダルクは、京都府木津川市にある薬物・アルコール問題を抱えている人が薬物を使わず自立して生きることをサポートする薬物依存者回復支援施設です。仲間同士で助け合い薬物問題から解放される希望のある場所。家族のような暖かい居場所として自然環境あふれた場所で共同生活をしています。

薬物使用、使用目的の所持を非犯罪化した国 ～ポルトガル薬物政策調査～

2001 年に薬物使用目的の所持に対して刑事罰を廃止したヨーロッパで最初の国となったポルトガルの薬物政策調査のため、2014 年 8 月下旬に龍谷大学大学院石塚伸一先生の研究会メンバーである、丸ちゃんこと立正大学准教授丸山泰弘氏、たけぞうこと三重ダルク施設長市川岳人氏と 3 人での調査に向かった。

（次のページに続く）

INDEX 目次

P1. 薬物使用、使用目的の所持を非犯罪化した国 ～ポルトガル薬物政策調査～

P2. 薬物使用、使用目的の所持を非犯罪化した国 ～ポルトガル薬物政策調査～

P3. ミネソタモデルからハームリダクション

P4. 薬物諫止（思いとどまらせる）委員会

P5. 仲間の話「覚せい剤を使わず楽しく生きる」 AIDS 文化フォーラム in 京都報告 「HIV 陽性者の地域での暮らしを支えるために」

P6. 仲間の話「薬物を使っている頃の自分」 アパリウエストセミナー報告 「これからの回復支援～ダルクの向かう未来」

P7. 活動報告

P8. ご寄付のお礼とお願い

特定非営利活動法人 アジア太平洋地域アディクション研究所 木津川ダルク

〒619-0214 京都府木津川市木津内田山 117 番地

TEL/FAX 0774-51-6597

E-mail kizugawa.darc@gmail.com

Web www.apari-west.org/kizugawa-darc

これには理由があり、ポルトガルの人口が約 1009 万人（1997 年）に対して薬物使用者（多くがヘロイン）が約 10 万人に達しために抜本的な政策変更に迫られた。さすがに 1 %が薬物使用者となり刑務所に入れることになると国民が受刑関係者か刑務所関係者のようになり国家が破綻しかねない。そこで 1997 年に専門家グループを召集し新たな薬物と薬物依存に関する国家戦略が立案され、2000 年に薬物の個人使用と使用のための所持は非犯罪化され、その法律は 2001 年 7 月から施行されました。また、その政策が成功を収めることとなりこの政策が南米やヨーロッパでもモデルする動きが出来ている。

今回コーディネートをしてくれた丸ちゃんが、Agência Piaget para o Desenvolvimento（APDES）の所長 Jose さんと連絡を取り合って実現できた。しかし、Jose さんとの連絡がうまく取れず現地に行くまで本当に調査や視察が出来るか不安だったようだ。私は何とかなるだろうと楽観的に考えていた。最悪のことも考えていくつかの機関にコンタクトを取り訪問先を追加しておいた。

調査員の 3 名も忙しくそれぞれポルトガル入りをすることとなった。私は丸ちゃんと乗り換えのためのフランクフルト空港で合流、リスボン空港へ向かう。アメリカのような入国のための ESTA もなくフランクフルト空港でパスポートの提示だけでリスボン空港では何の審査もなかった。このあたりも EU となったからなのでしょうね。簡単に入国できたことに驚きました。ホテルに着いたのは夜遅くになったので街を歩いてみたがほとんどのお店はしまっていました。仕方なく帰ろうとした時、手作りブレスレットの押し売りに若干時間を取られ、これも旅の思い出のひとつとなるかと笑いながらホテルに戻りました。たけぞうは遅れて 27 日にポルトで合流予定。

いよいよポルトガル薬物政策調査へ。26 日の午前中は近くのサン・ロッケ教会で今回の調査と安全をお祈り。装飾が豪華で驚くばかりでした。この建築は後のイエズス会の建築的手本となったそうです。昼食のため海鮮料理店を目指して街を歩いたが古い建築物がたくさん残されており素敵な町並みでした。

午後は、The European Monitoring Centre for Drugs and Drug Addiction （EMCDDA） を訪問。1993 年に設立、1995 年にリスボンに設置された。

ここではヨーロッパ各国の薬物と薬物依存の情報を集約し薬物関連情報については卓越した研究拠点となっている。膨大な量の英語の報告書を頂き、丸ちゃんと分担して持ち帰ることになった。（翻訳協力者はアパリまで）

夜には現地の NA ミーティングにも参加。参加者のほぼ全員がポルトガル語で話すので内容はわからなかった。ただ、このフェローシップには言語は関係ない。ミーティング後、一緒に食事をすることになった。英語が話せて日本好きの青年とまるちゃんの通訳を交えて日本とポルトガルの話をした。その青年が「日本との 1 番の違いを教えてくれ」と聞いてきたので、文化のことや国民性とかしばらく考えたあげくに、「日本では 2 度の覚せい剤使用逮捕で 3 年以上刑務所に入るよ」と言うと目を丸くして、しばらく絶句していた。その顔を見て、僕とまるちゃんは爆笑していた。そんな楽しい夕食も終えホテルに戻ると時刻は 23 時すぎに、ポルトガルの日の入りが遅く 20 時ぐらいまでは明るいので夕食も 21 時ぐらいから始まる。長い 1 日がこの後も続く。

街で観光客相手のドラッグの売人と出会ったので、どんなものがあるのか聞いてみるとチョコ（大麻樹脂）を持っていた 1g で 50€だった。ちょっと高いかなと思った。ボスを呼べば他のドラッグもなんでもあるとのこと。後で現地メンバーに聞いてみたところ、観光客相手の偽物も多いとのこと 50€は高すぎるっていっていた。法律が変わり大麻なら 25g まで持っていてもお咎めなしなので、密売時も規制量を超えない量で売るようにしているようだった。

所持薬物	g
ヘロイン（Heroin）	1
メサドン（Methadone）	1
モルヒネ（Morphine）	2
コカイン（Hydrochloride）	2
カンナビス（Leaves and Flowers or Fruited dons）	25
LSD	0.1
MDMA	1
覚せい剤（Amphetamine）	1

27 日の朝、Jose さんたちがホテルまで迎えに来てくださり、早速 SICAD（保健省）を訪問し、国家戦略としての薬物政策において財源の浪費を招いた刑罰中心の政策から医療、そして統合された介入（諫止）への転換、DAAC（Drug Addiction Dissuasion Commissions：薬物依存を諫止する委員会）などを紹介していただいた。2013 年から始まったアルコール、ギャンブルを含めた嗜癖行動と依存を減らすための国家プランがあることをお聞きした。また、危険ドラッグへの対応として販売店の閉鎖などの対応も聞けた。

午後からは、NGO の GAT：IN-MOURARIA というプロジェクトの統合センターを訪問した。30 ㎡ほどの小さめの多目的スペースは、基本的なニーズへの対応（栄養補助食品提供、バスルーム、クローゼットへの利用）、消耗品（注射器、喫煙パイプや他の材料）の提供とコンドーム（感染症予防のため）の配布などがされている。ここでは地域のために一般市民に開放されています。HIV や肝炎の予防やホームレス支援などを行い簡単な食事のサービスなどもあり、ソーシャルワーカーやピアカウンセラーが利用しやすい環境を作っていた。貴重品や処方薬の管理なども行ってくれる。これでリスボンの調査を終え、ポルトの街まで約 300km を車で移動。リスボンが東京とすればポルトは大阪でしょうか。ポルトの街は「ポルト歴史地区」として世界遺産になっている素敵な街です。

28 日はコーディネーターJose さんが所長を勤める APDES を訪問。薬物問題以外にもセックスワーカーや HIV 陽性者への支援、アフリカでの子供とその家族支援のために学校の設置、政策支援など幅広い活動を行っている。バンにより巡回訪問を行いメサドン療法や注射器の配布等を行い同時にカウンセリングなども無料で行っている事業にも同行させていただいた。また、活動だけではなく、研究を行いエビデンスに基づいた政策提言を行い、政府主導からコミュニティ主導の事業へ移行することでよりコストを下げ、地域に根ざした活動を行っていた。多くのスタッフが女性だったのが若干の驚きでもあった。薬物依存者からの危険を感じることや暴力を受けたことなどないかを聞いたが、一度メサドン療法の巡回訪問用バンが襲われメサドンを奪われそうになったが、バンに立てこもり警察に通報したことがあったねと笑顔で話してくれた。

午後は、TC（Therapeutic Community）を訪問。ミネソタモデルにて 4 段階のプログラムがあった。①グループでの生活と衛生管理、絵画プログラムやスポーツ、菜園などを仲間と行う。②仲間のサポートと役割の付与と管理、菜園管理や施設清掃。③施設外での交流と活動、教育、免許取得や家族との関係修復、金銭の所持や週末の外出とその報告。④退所の準備と就労準備、外出機会も増える。施設規模は定員 20 名、スタッフ 6 名。利用期間も 1 年～1 年半、80%がプログラムを完了するが 5 年後の断薬継続率は 5 %程度とのことだった。ダルクに近い運営をしているようだった。

夜は調査メンバーと現地コーディネーター、スタッフと会食、てんぷらの元になったものなど、味は日本人の私の舌に合うものが多くあった。ただ、ひとつ頼んでも 2 倍ぐらいの量で出てくので太る一方です。

29 日の午前中はポルト刑務所、午後は薬物諫止（思いとどまらせる）委員会を訪問。刑務所では副所長と医務部長に案内していただいた。700 名程度の定員に 200%に迫る 1200 名程度の受刑者と過剰収容状態だった。窃盗、密輸での受刑者が多く、全体の 70-72%が薬物関連。依存症と分かれば特別ユニットでの受刑となる。充実した医療部門では、歯科なども最新設備で充実していた。精神疾患や障害者など重複障害について尋ねたが、刑務所には入れることなく別のサポートがあるようだった。IQ テストもなく、関係を持っていれば気がつくし、そのとき必要な支援をすればいいということで、大らかというか懐が深さを感じた。その後は、TC ユニット（薬物を止め続ける受刑者のユニット）にて、受刑者と自由に話をさせていただいた。それぞれの部屋を拝見させていただいた。家族写真が張られ、ラジカセなども置かれていた。6 畳ぐらいの

スペースにベッドが二つと身の回り品が置かれていた。時計やピアスなどもしており自由な感じだった。当然受刑服もない。刑務所内では薬物使用禁止になっているが使う受刑者も多くいる。TC ユニットに入れるのは薬物使用を止めたものだけが移れるユニットとなっていた。ここだけは過剰収容もなく、ゆったりとした環境だった。リビングのような空間もあった。生活態度がよければ、数ヶ月に一度家族の元へ外泊もできると言っていた。罪名はここでも薬物使用のための窃盗や密売、密輸が多かった。

午後からは、薬物政策の最も重要な部分を担っている CDT-PORTO を訪問。全国に 22 ヶ所ありポルトの委員会予算額は年間 20 万 4 千€（約 2800 万円）。少量の薬物所持は非犯罪化されているが一定量持っていると委員会出席を課せられる。呼び出しに応じないと次に来た時に行政処分としての 25€程度のペナルティが課せられる。委員会は、理事 3 名、技術スタッフ 4 名、心理士 2 名、SW1 名、法律家 1 名、事務 2 名にて依存症のアセスメントや評価を行い適切な資源につながるようにサポートをしている。多くがＴＣや医療機関などに紹介されることが多いようだった。教育機関とのネットワークもあった。ここで出された提案やアドバイスに従わなくても罰則はない。この提案に従わなくても罰則がないあたりダルクでの対応と似ており親近感を感じた。薬物の所持、使用に罰則がないので当たり前といえばそうなのだが日本での常識から考えるとなんとも思いやりのある委員会であった。

この訪問を最後にポルトガルでの調査を終えることになったが、薬物の使用が非犯罪化されているので、街に薬物使用者がうろうろしているかといえば、そんな感じはまったくなかった。夜に一人で出歩いても危険を感じることはなかった。実際、穏やかでのんびりした印象を受けた。

非犯罪化することで投獄するより医療や福祉的政策がコスト面からも安上がりになり、実際、治療を受けようとする人が増えた。これにより HIV の感染症も減ることとなり、感染率は 17%も減少。また、十代の薬物使用も減り、大麻の 15 歳以上の生涯使用率は 10%だという。ちなみにアメリカでは 39.8%。この数字からも薬物問題の解決に導いた政策だといえる。ポルトガルの政策を簡単に日本に導入することは出来ないが、「ダメ！ゼッタイ！」で厳しくすることが最善の方法ではないことを実際的に知ることとなり、学ぶべきものがあった。

日本では、28 年 6 月までに「薬物使用等の罪を犯した者に対する刑の一部の執行猶予制度」が施行されることが決まっている。より積極的な社会内処遇を行うことが、その再犯防止・改善更生に有用かつ必要と考えられている。しかし、依存の改善だけではなく、薬物によって苦しんでいる人が「より健康に生きることをサポートする」そんな支援が本人にとっても家族にとっても、そして社会にとってもより良いものであるし、日本でも依存症だけを見るのではなくもっと大きく見ながら、個人を支援するようなハームリダクション政策が行われるようにムーブメントをおこしていきたい。

＊EMCDDA：*http://www.emcdda.europa.eu/*
＊ナショナルレポート/2013.ポルトガル：
http://www.emcdda.europa.eu/html.cfm/index228487EN.html
＊SICAD：
http://www.sicad.pt/pt/Paginas/default.aspx
＊GAT: *http://gatportugal.org/*
＊APDES： *http://www.apdes.pt/v1/*
＊CDT：
http://www.sicad.pt/PT/Dissuasao/SitePages/Contactos.aspx

相談・面談のご予約、お問い合わせは、
月曜～土曜日 10：30～16：00 です。
TEL/FAX 0774-51-6597
合法、非合法を問わず薬物のことでお困りの方は
お気軽に問い合わせください。
秘密は厳守いたします。
その他の詳しい情報は、
www.apari-west.org/kizugawa-darc まで

覚せい剤を使わず楽しく生きる エチゴヤ

僕は依存症だということに気付いていませんでした。そして、本当に止めようとも思えていませんでした。だから病院での治療プログラム、ＤＡＲＣでの回復プログラムを受けようと思いませんでした。

結果、再び逮捕される事になりました。

刑務所に行かなければならない状態になり、もしかしたら刑務所に行っている間に父母が亡くなってしまうんじゃないか、昨年病気で旅立ってしまった姉の分も僕が頑張ると思っていたのに何をしているんだと自分自身への怒りと悔しさでいっぱいになりました。

何故いつも自分の想いとは反した結果にばかりなるのか分かりませんでしたが、自分の想いとは矛盾した行動ばかりで責任のある行動は何ひとつ出来ていなかったからだと気付かされました。

面会に父、母、兄が来てくれましたが謝ることもできず何も言えませんでした。ただ、これだけ裏切ってばかりの僕を家族はまだ信じてくれていました。嬉しかったですがそれより辛い気持ちの方が大きかったです。人が信じてくれる事の重さを知りました。自分がどれだけ大きな愛情をもらっているのか分かりました。

そこまで来てやっと絶対にやめようと思えました。そして保釈を頂き病院、DARC につながらせてもらうことになりました。

病院では条件反射制御法というものを受け本当に効果があったと感じています。病院生活が終わる頃に 1 審の判決では再度の執行猶予をもらうことが出来ました。そして検察官控訴をされ、木津川 DARC に入寮することになりました。心を開き自分の話をすることを今まで全くしたことのなかった僕にとって 1 日 2 回のミーティングと 1 日 1 回の NA はなかなかハードなものでした。最初は何が仲間やと思っていましたが DARC の仲間と NA の仲間はいい笑顔をくれますし真剣に話を聞いてくれますし、自分の回復を守ってくれている存在だと感じています。

病院、DARC の生活を通して人がしてくれた事をしっかりと活かして行くことが感謝する事であり、裏切らない事じゃないかと思っています。そう思えていることが希望でもあります。

現在は控訴審の判決を待っている状態です。判決がどちらであれハイヤーパワーの導きだと思えていますし、これからの自分の人生にとってはとても良い 1 年を過ごさせてもらったと感じています。覚せい剤なしで楽しく、目標に向かってしっかりと生きていきたいです。亡き姉にもどこか一緒に感じてもらえるようにやっていきたいです。

ありがとうございました。

AIDS 文化フォーラム in 京都報告 「HIV 陽性者の地域での暮らしを支えるために」

エイズについて考える「AIDS 文化フォーラム in 京都」が 10 月 4･5 日と京都市の同志社大新町キャンパスで行われた。

HIV 陽性者の支援などを考えるフォーラムとして、今年で 4 回目をなる。京都ダルクの頃から参加をさせて頂いており、ブースの設置やモデルミーティングなどを行い薬物依存と感染症に関するメッセージを伝えてきた。本年は、「HIV 陽性者の地域での暮らしを支えるために～ダルクの実践～」として報告をさせて頂いた。少しご紹介させて頂きます。

ダルクではこれまでに数名の HIV 陽性者を受け入れてきました。初めて受け入れる時にスタッフの勉強会開催や同居する他の入所者の偏見や誤解、差別的な行為など苦労などのエピソードと、それ以前にもダルクでは C 型肝炎の仲間も少なからずおり、爪切りやシェイバーの使いまわしの禁止などは行われてはいた。しかし、C 型肝炎より HIV のほうが感染のリスクは低いのに HIV に関する無知からいらぬ不安や誤解が多かった。現在では HIV 陽性のカミングアウトについても本人の意向を尊重する対応を取るようになってきた。

また、ダルクを利用する HIV 陽性者に MSM（男性間性交渉者）がほとんどである。一部の MSM にとって、かつての脱法ドラッグ（ゴメオなど）が性的興奮や快感を高めるドラックとして使われており、出会い系サイトやハッテン場などで入手、使用がされていたようだ。後に脱法ドラッグも法の取締りを受けるようになり、元々違法であった覚せい剤と同じような物となり移行する者も少なくなかったのではないなど、これまでの経緯とこれから薬物依存の問題を持つ HIV 陽性者がいかに地域で安全に安心して暮らしていく環境を整えていくのか課題などを報告しました。

2 日間にわたり延べ 1200 名の参加者があり、多様な団体や個人が発表と交流を通してエイズを知り、多くの学びと気づきがあった大会でした。

まだまだ薬物依存者と同じく根強い誤解や偏見にさらされ、声すら上げにくいマイノリティの HIV 陽性者が排除されることなく、必要なサポートが受けられる社会であることを願ってやみません。

来年も 2015 年 10 月 3 日（土）4 日（日）同志社大学で予定されています。ぜひ、沢山の出会いと HUG を楽しみにしております。

薬物を使っている頃の自分

けんじ

僕が初めて薬物と出会ったのは 14 歳の頃にシンナお覚えました。

当初は警察に補導されるまで吸い続けていました。両親に不満がある訳でもなし、単なる好奇心だった様に思います。17 歳で覚せい剤と出逢い、始めは覚えたての頃、正直いつでも止められると思っていたように思います。気がついたころには、40 歳過ぎても薬をやめることができなくなっていました。家族や周りの人達に嘘や言い訳で金銭面でも数多くの人に迷惑をかけっぱなしだった様に思います。ダルク事態を私が知ったのは今から 6.7 年前に覚せい剤で逮捕された時に妻から某警察の差し入れの時に初めてダルクの本を読みました。それから現在施設に入寮して 10 カ月が過ぎました。6 か月のクリーンを続けています。入寮当初は薬が止まらず、環境を変えることで薬を止められると思っていました。

しかし、何一つ止めることができず施設で使い続けていたと思います。何故薬が止まっているのかというと使っているうちにやめ続けている仲間に対して罪悪感を自然と感じるようになってきました。

とりあえず今日一日薬を使わずに生活すること、始め和結構しんどかったと思います、やめつづけるということ、簡単そうに見えても

生半可な気持ちで取り組むことが出来ないと知りました、ただ仲間といるだけで薬が止まる訳がありません。施設で色んな体験をしていく中、この人達とならひょっとしたら自分も止めて行けるかもと・・・薬なしの新しい生き方、正直自分一人ではやめ続ける事は無理だと思います、仲間と一緒ならやめて行けるかもと？思うようになりました。

正直明日の事ははかりませんけど、今日一日薬なしの生活を継続して行こうと思います。

APARI WEST Seminar 報告
「これからの回復支援～ダルクの向かう未来」

ダルクは来年で 30 周年を向かえます。全国に 59 ヶ所までに拠点も増え多様な支援を行う薬物依存者回復施設となりました。その経験を内外共に分かち合おうと経験豊富な施設長に集まって頂き、12 月 13 日（土）14 日（日）大阪市にあるマイドームおおさかにてセミナーに開催しました。

1 日目はいくつかのダルク施設長が持つカラーの中にも共通するセオリーや理念について発表があり、2 日目は、初期トリートメント型や特徴あるダルクの実践、また、司法、医療、地域福祉との連携の実際や課題の報告がありました。

寒波におそわれた寒い大阪でしたが 120 名近くの参加者があり、ダルクの施設長、スタッフをはじめ、家族、司法関係、福祉関係者、精神科医、ヨーガ療法士と多様な領域からご参加いただけました。2 日間の長いセミナーでしたが、アンケートでも 41 名が役に立つと評価していただけました。いくつかご感想を掲載させて頂きます。

- **これからのダルクのありかたで全国に様々なダルクがある中、最先端を行くダルクの様子が覗くことができ、家族として大変勉強とになりました。ありがとうございます。（ご家族）**
- **中々このようなセミナーはなかったので大変良かったです。私たち家族もダルクのことは分からず、本人（ダルクには居るが）から聞く機会ないので…。やはり運営資金はどこも大変なのが現実。又、ダルクも医療機関、行政など、関わりがすごいなと思いました。来年も是非参加したいと思いました。**
- **私は専門プログラムが今後の支援に重要な資料になるのではないかと考えていましたが、本人のモチベーションによって効果が変わってくると話をされて確かにそうと共感しました。本人の選択できるメニューを増やすことが重要だと感じました。今回初めてダルクの方の話を聞きましたが独特の空気感を持っていて面白かったです。（福祉関係者）**
- **目からうろこの企画でした。これだけダルクが社会化、多様化されると、一般市民や専門家にとってダルクとは何かイメージが持ちにくくなると思いますので、ぜひ、このような企画を続けて頂きたいなと思いました。残念なのは、こんなおもしろい企画なのに本人、家族以外の関係者の参加が少ないかなと思ったことです。初期のダルクを作った人たちが高齢化したり、亡くなっていったりする中、次の世代の方たちにはこれからも元気に活躍して頂きたいなと思います。（司法関係者）**
- **講演者の皆様の考え方を知り、同じ職種の立場として救われた思いです。ありがとうございます。（薬物依存者）**

活動報告

５月１０日　関西エリアギャザリング参加
（１泊２日：こんぜの里にて）
１２日　龍谷大学研究会
２２日　広島Ｄネット講演
２４日　親＆子どものサポートを考える会参加
２８日　京都府立山城高等学校講演
３１日　ピア岐阜家族会フォーラム参加

６月　２日　大阪ダルク＆木津川ダルク
ソフトボール試合
５日　石川県神経科精神科医会学術講演会講演
７日　電話相談事業研修会講演
９日　龍谷大学研究会
１４日　木津川ダルク開設記念フォーラム勉強会
１５日　木津川ダルク開設記念フォーラム
１８日　神戸学院大学講演
２３日　Ｋ－ＤＡＲＣ会議
２７日　アジア犯罪学会セッションにて報告

７月　２日　京都府立鳥羽高等学校講演
７日　奈良保護観察所来訪
１７日　山城町森林公園キャンプ（１泊２日）
２０日　アディクションフォーラム in 滋賀

８月　１日　若年性認知症サポートファンド会議
４日　龍谷大学研究会
８日　磐梯ダルク施設長お別れ会
２１日　ＪＲＣＮＡ（ＮＡ日本･リージョナル･コンベンション）参加（３泊４日）
２５日　ポルトガル薬物政策調査（７泊８日）

９月１３日　条件反射制御法維持ステージ研修会
１４日　愛知家族会講演
２０日　沖縄ダルクフォーラム参加

９月２１日　ＮＡ沖縄ギャザリング参加
（１泊２日）
２４日　近畿更生保護委員会来訪
２５日　京都ダルク･ワイオリセミナー参加
２７日　仙台ダルクフォーラム参加
２９日　龍谷大学研究会

１０月３日　アルコール関連問題学会合同学術総会
（２日目シンポジウム報告）
５日　エイズ文化フォーラム京都講演
１１日　ＤＡＲＳ in 仙台（２日間）
１８日　日本犯罪社会学会参加
２２日　京都府立洛南病院院内研修会①講演
３１日　京都府立洛南病院院内研修会②講演

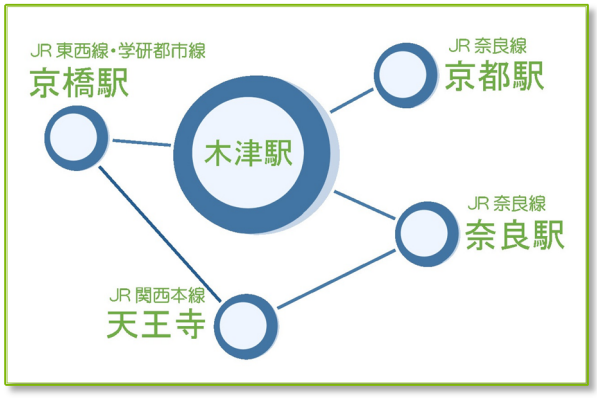
１１月３日　京都ダルク&大阪ダルク&木津川ダルク
ソフトボール試合
５日　京都府立城陽高等学校講演
８日　京都ダルクフォーラム参加
９日　新潟家族会講演
１０日　三郷町三郷中学校講演
１４日　ＪＣＣＡ鳥取（２日）
１６日　アディクションフォーラム in 鳥取参加
２１日　びわこダルクフォーラム参加
同志社大学社会学部講演
２２日　京都マックフォーラム参加
金沢ＨＡＰＲ講演
３０日　広島ダルクフォーラム参加

レクリエーションやメッセージ活動

ヨガプログラム月２回、鍼灸レク月２回
汐ノ宮温泉病院メッセージ月２回
食事会、誕生日会、カラオケ、ハイキング。

木津川ダルクへのアクセス

JR 東西線･学研都市線･奈良線･関西本線
「木津」駅 下車 徒歩 10 分



1992 年 6 月 5 日 第三種郵便物認可 （毎月 1 回 25 日発行） 2015 年 1 月 12 日発行 KTK 増刊通巻 4237 号

木津川ダルクへのご寄付・ご寄贈でのご支援を頂き、誠にありがとうございました。

皆様より、沢山のご支援を頂き、今日も回復のプログラムを実践することが出来ております。心より感謝いたしております。
（平成 26 年 5 月 1 日～平成 26 年 11 月 30 日到着分・順不同 :ニュース購読会員を含む）

ご寄付 総額 77万2千円

足立 修一 様	須永 杏子 様	池添 素 様	遠山 大輔 様	橋爪 弘 様	柳 つとむ 様
坂根 輝吉 様	小西 憲 様	挾間 祖章 様	山崎 祥子 様	伊藤 富美子様	小原 健司 様
国分 妙子 様	奥村 禮子 様	吉田 眞佐子様	宮田 末子 様	平田 幸子 様	坂和 優 様
河崎 幾恵 様	川島 康史 様	西本 拓史 様	光田 豊茂 様	北村 武則 様	福島 至 様
越後谷登志恵様	布目 潮崇 様	平尾 美知江様	山本 奈生 様	牧村 滋子 様	和田 明美 様
堤 朱美 様	藤光 明美 様	山脇 強 様	重田 倫江 様	伊藤 直美 様	塩見 静子 様
佐藤 純 様	福西 毅 様	山下 洋子 様	河合 友義 様	菅沼 登志江様	横田 誠 様
山本 浩 様	小沼 杏平 様	友杉 明日香様	平尾 美知江様	山下 弘子 様	河本 朱美 様
藤 喬 様	村田 順一 様	梅田 靖規 様	南 典子 様	北濱 隆 様	小島 典子 様
中元総一郎 様	中尾 優子 様	美濃沙央理 様	西谷 裕子 様	小薮 俊彦 様	清水 三鈴 様
池田 時造 様	坂口 富彦 様	久保 二郎 様	寺本 盛行 様	香川ダルク 様	とかちダルク 様
相模原ダルク様	東京ダルク 様	川崎ダルク 様	横浜ダルク 様	熊本ダルク 様	沖縄ダルク 様
新潟家族会 様	岡山ダルク 様	ピア岐阜家族会様	京都ダルク 様	栃木ダルク 様	山梨ダルク 様
広島ダルク 様	鳥取ダルク 様	茨城ダルク 様	びわこダルク 様	京都マック 様	やぎ薬局 様
日本アウェイクニングハウス 様		小島 純雄 様	栄子 様	十輪寺	加藤 章善 様
広島Dネット 様		小島 典子 様	成容 様	阿星山診療所	本谷 研司 様
三重ローカルアクト 様		（有）モルガンデータシステム 様			匿名の方々

ご寄贈 （お米、食料品、お菓子、石鹸、タオル、食器、衣類、書籍、家電品など）

戸田 秀子 様	坂田 ともこ様	岡田 清 様	清水 三鈴 様	平尾 美知江様	橋爪 弘 様
佐々木 広 様	栗原 豊 様	南口 芙美 様	美濃沙央理 様	岸野 佳和 様	対馬 隆行 様
匿名の方々					

今後とも木津川ダルクの活動をご理解頂きご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

※ 大変恐縮ではありますが、発送作業簡略化のため、皆様に郵便払込取扱票を同封させていただいております。また、郵便局でお受け取りになる受領書をもって領収書とさせて頂きます。領収書の必要な方は「領収書希望」、ニュースレターへのお名前の掲載をご希望されない方は「匿名希望」、と郵便払込取扱票通信欄にお書きくださいますようお願いいたします。

ご寄付・ご寄贈のお願い

昨年の開所以来、ここまで支えてくださった、たくさんの方にただただ感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。このニュースレターをお送りする頻度も年間 6 回を考えておりましたが、資金難とスタッフ不足、第三種郵便物の認可の問題もあり、創刊号からこれで 3 号目が精一杯となってしまいました。送付回数が減ってしまったこと大変申し訳ありません。もっと、回復に関する情報やダルクを知っていただける充実した内容のニュースをお届けできるようにがんばります。また、皆様のご期待にお応えできるよう、回復支援において鋭意努力いたす所存でございますので、何とぞ一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

また、ご家庭で余っている食料品や生活用品など（米、野菜、乾物、味噌、しょうゆなどの食料品や石鹸、シャンプー、タオルなどの日用品）がございましたら「木津川ダルク」まで、ご寄贈していただけると助かります。何卒、よろしくお願い申し上げます。

ご寄付のお振込み銀行口座

京都銀行 木津支店 普通口座
口座番号:3765453
口座名： 木津川ダルク 代表 加藤 武士
（キヅガワダルク ダイヒョウ カトウタケシ）

編集後記

今年の夏には仲間たちと東京で行われたアディクトの祭典NAコンベンションに参加することが出来ました。参加した仲間は薬物を必要としない楽しみ方を感じ取ってくれたことでしょう。また、多くの仲間と出会い、希望ある回復のモデルを見つけたと思います。薬物問題はシリアスな問題だけに暗く重苦しいことも多いので、笑い、楽しむことも学ばなければなりません。どうか見守っていてください。

木津川ダルクニューズレター HOPE No. 3
編集 加藤 武士 NPO 法人 アジア太平洋地域アディクション研究所 木津川ダルク

〒619-0214 京都府木津川市木津内田山 117 番地
TEL/FAX 0774-51-6597
E-mail kizugawa.darc@gmail.com
Web www.apari-west.org/kizugawa-darc

頒価 1 部 200 円 年間購読費 2000 円（購読料は年会費に含まれます）
発行所 京都障害者団体定期刊行物協会（KTK）
発行人 高谷修
〒602-0000 京都市上京区堀川通丸田町下る
京都社会福祉会館内 京都難病連